

154 イエスを信じない者たち、イエスの言葉による裁き

ヨハネによる福音書 12 : 37～50



▶イエスを信じない者たち（ヨハネによる福音書 12 : 37～43）

37 このように多くのしるしを彼らの目の前で行われたが、彼らはイエスを信じなかった（→不信仰な状態を続けた）。

38 預言者イザヤの言葉が実現するためであった。

彼はこう言っている。

「主よ、だれがわたしたちの知らせを信じましたか（→疑問文）。（そうです、信じた者は多くはいませんでした。）主の御腕（→神の力）は、だれに示されましたか（→疑問文）。」

→イザヤ書 53 : 1

わたしたちの聞いたことを、誰が信じようか。主は御腕の力を誰に示されたことがあろうか。

39 彼らが信じるができなかった理由を、イザヤはまた次のように言っている。

40 「神は彼らの目を見えなくし、／その心をかたくなにされた。こうして、彼らは目で見ることなく、／心で悟らず、立ち帰らない（→回心しない）。わたしは彼らをいやさない。」

→イザヤ書 6 : 10

この民の心をかたくなにし／耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく／その心で理解することなく／悔い改めていやされることのないために。

41 イザヤは、イエスの栄光（の幻）を見たので、このように言い（→預言し）、イエスについて語ったのである。

→（リビング・バイブル）この預言は、イエスのことを指しています。イザヤは、メシヤの栄光の幻を見て預言したのです。

42 とはいえ、議員の中にもイエスを信じる者は多かった。ただ、会堂から追放されるのを恐れ、ファリサイ派の人々を**はばかって**（**憚って**：敬遠し→意識して人や物事を避けること、表面的には敬うような態度をして、実際には疎んじて親しくしないこと）公に言い表さなかった（≡隠れキリシタン）。

→ファリサイ派は、ユダヤ人会堂を管理していた。その指導者の中には密かにイエスを信じる者もいたが、ファリサイ派によってユダヤ人会堂から追放されることを恐れ、このことを公言しなかった。

ユダヤ人指導者たちは、イエスを信じるようになった者をユダヤ人共同体や会堂から追放した（ヨハネ 9 : 22、34）。ユダヤ人が同胞から追放されることは旧約聖書にも見られる（エズラ 10 : 8）が、実際にはエルサレム神殿の崩壊（AD70 年）後に起こった。

【一言】村八分

村落（村社会）の中で、掟や秩序を破った者に対して課される制裁行為で、一定の地域に居住する住民が結束して交際を絶つこと（共同絶交）である。地域社会から特定の住民を排斥したり、集団の中で特定のメンバーを排斥したりする行為を指しても用いられる。

地域の生活における十の共同行為である①冠（元服）、②婚、③葬、④建築、⑤火事、⑥病気、⑦水害、⑧旅行、⑨出産、⑩年忌（仏事）の10種のうち、③葬、⑤火事を除く8種に関する交際を絶ち、扶助を行わないことを決めたり、村の共有財産の使用や寄合への出席を停止する。村八分を受けると、村での生活は非常に不自由になるので、元通り交際してもらおう挨拶を「わび（詫び）を入れる」という。

43 彼らは、神からの誉れよりも、人間からの誉れ（≡評価）の方を好んだのである。

▶イエスの言葉による裁き（ヨハネによる福音書 12：44～50）

44 イエスは叫んで、こう言われた。

「わたしを信じる者（＝神を信じる者）は、わたしを信じるのではなくて、わたしを遣わされた方（＝神）を信じるのである。

→①イエスは父なる神を証言するためにこの世に来られた。

→わたし（イエス・キリスト）を信じる＝わたしを遣わされた方（神）を信じる

45②わたしを見る者は、わたしを遣わされた方を見るのである。

46 わたしを信じる者が、だれも暗闇の中にとどまることのないように、

③わたしは（この世の暗闇の中に輝く）光として世に来た。

47 わたしの言葉を聞いて、それを守らない者がいても、わたしはその者を裁かない。

④わたしは、世を裁くためではなく、世を救うために来たからである。

⑤イエスを拒む者は、イエスの言葉によって裁かれる（48～50 節）

48 わたしを拒み、わたしの言葉を受け入れない者に対しては、裁くものがある。わたしの語った言葉が、終わりの日にその者を裁く。

→神の子イエスを信じる者は復活し、永遠の命を得る。

49 なぜなら、わたしは自分勝手に語ったのではなく、わたしをお遣わしになった父が、わたしの言うべきこと、語るべきことをお命じになったからである。

50 父の命令は永遠の命であることを、わたしは知っている。だから、わたしが語ることは、父がわたしに命じられたままに語っているのである。」

【参考】イザヤ

イザヤ（「ヤハウエは救い」、「ヤハウエの救い」という意味）は、記述預言者の中、最大の人物と言われた。アモツの子（列王記下 19：2）としてエルサレムで生まれ育ち、王ウジヤの死んだ年、BC 742/740 年 20 歳の頃（イザヤ書 6：1～13）にユダ王国の首都エルサレムで、約 40 年にもわたって預言活動をしたイスラエルの代表的な預言者である。伝説によれば、ユダ王国（南王国）マナセ王時代（BC 687～642）に殉教した。

【参考】イエスの遺体を引き取る危険を冒したヨセフとニコデモ（ヨハネによる福音書 19：38～39）

その後、イエスの弟子でありながら、ユダヤ人たちを恐れて、そのことを隠していたアリマタヤ出身のヨセフが、（危険を顧みず）イエスの遺体を取り降ろしたいと、ピラトに願い出た。ピラトが許したので、ヨセフは行って遺体を取り降ろした。そこへ、かつてある夜、イエスのもとに来たことのある（ファリサイ派の）ニコデモも、没薬と沈香を混ぜた物を百リトラばかり持って来た。

→ヨセフは、エルサレムの北西約 32 km の村アリマタヤの出身で、裕福だったので、イエスの遺体を適切に埋葬する経済的なゆとりがあった（マタイ 27：57）が、弟子すらも逃げ出した危険な状況下であった。外典、「ニコデモによる福音書」（別名：ピラト行伝）では復活したイエスの最初の目撃者とされる。

また、ニコデモ（ヨハネ 3 章）は最高議員に属する議員で、ファリサイ派の教師でもあった。ファリサイ派の人々はイエスを殺そうと企んだ（ヨハネ 11：46～47）。ヨセフとニコデモは、共にイエスの遺体を引き取る危険を冒した。

イエスが亡くなったのは、金曜日の午後 3 時頃（マタイ 27：46 他）、ユダヤでは日没で一日が終わる。翌日は安息日なので、イエスを十字架から降ろすことはできない。限られた時間の間に、ヨセフは自分の人生を変える大きな決断をした。イエスの弟子であることを公言することで、今まで築いて来た地位も名誉も財産も失い、迫害される危険もあった。そんな危険を顧みないヨセフの行動によって、ヨセフの用意した墓（マルコ 15：46）が、イエスの復活の舞台となったのである（マタイ 27：53）。突然、人生を左右する分岐点に立たされた時、真の正しい道を選び、勇気を持って確実に歩いていける人でありたい。